

会社案内



since 1952.2

Open our Door,
Please!

ごあいさつ

限られた地球資源を再利用できる方法で様々な工業用機械部品の品質向上を図るコーティング処理技術で独自理論にこだわり開発！新しく難しい加工品に挑戦！常に改良、改善の精神で社会に貢献しております。

経営理念

感謝・報恩



「東京発中小・ベンチャー」
優良企業50社に
千代田第一工業株式会社が
選ばれました。

会社概要

名 称	千代田第一工業株式会社
本 社	〒201-0004 東京都狛江市岩戸北 3-11-9 TEL. 03-3488-4211 FAX. 03-3430-0437 https://www.daikuron.com
代表取締役社長	鈴木信夫
創 立	昭和 27 年 5 月
資 本 金	1200 万円
取 引 銀 行	商工中金 新宿支店・三菱UFJ銀行 成城支店

会社沿革

昭和 27 年 5 月	東京芝浦電気(株)重電機器関連受配受設備制作工場として千代田工業株式会社を設立し、鈴木張介が代表取締役社長に就任
昭和 32 年 10 月	東京芝浦電気(株)コンピュータ制作工場として設備増設
昭和 35 年 8 月	社名を千代田第一工業株式会社に変更
昭和 45 年 6 月	超硬複合金ダイクロンの開発に成功
昭和 50 年 5 月	ダイクロン営業部門新設 工場設備を増設し本格的営業販売活動を開始
昭和 60 年 10 月	専務取締役鈴木達雄が代表取締役社長に就任
平成 5 年 4 月	アルミ素材へのダイクロン処理に成功
平成 10 年 1 月	ブラストロン処理に成功
平成 16 年 4 月	代表取締役社長鈴木達雄が取締役会長に就任
平成 16 年 4 月	常務取締役鈴木信夫が代表取締役社長に就任
平成 17 年 10 月	東京都狛江市岩戸北 3-11-9 に本社移転
平成 22 年 1 月	ダイショットの特許取得

主要納入先

東洋製罐(株)
東レ(株)
旭化成(株)
(株)ブリヂストン
JFE スチール(株)
リコーグループ各社

事業内容

- ・超硬複合金ダイクロン処理
- ・ブラストロン処理

関連会社

- ・(株)千代田技研
関連部品製作

勝つ

千代田第一工業

● 老舗だけどベンチャー

3倍長くもつ

創業56年のベンチャー企業。現在、硬質クロムメッキ「ダイクロン」を主力に事業展開する千代田第一工業は、3代に渡ってその時々企業の変遷を経ながら新しいものに挑戦し、時代や景気の波の中を生き残ってきた。

この30年、同社を支えてきたのはダイクロンだ。混合触媒を使い、分子間の結合度が高い炭化クロム合金を母材にコーティングしたもので、ビッカース硬度

独自理論にこだわり開発

はHV1000を超え、摩擦係数は0.2μ。JIS基準の硬質クロムメッキと比べると硬度で25%以上、摩擦係数で5-6倍低い値を実現した。数値以上に剥離や摩耗に強く、ユーザーからは3倍長くもつと高い評価を得ている。メッキ液を独自の成分で配合しただけでなく、メッキ槽内の電気の流し方や研磨方法など、全部で10工程あればJ

採算に乗らず

この事業は千代田第一工業の初代社長、鈴木張介が65年に硬質クロムメッキを研究する会社を買収するところから始まった。銀行か

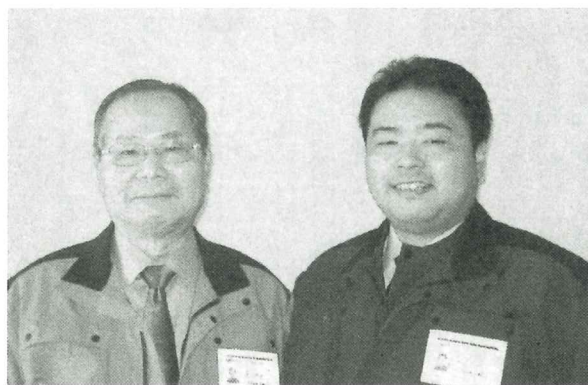
顧客のエアール心に刻む

ISに重なるのはせいぜい2工程程度というほどの独自のアプローチで高い性能を生み出している。

らの勧めもあって買収したが、硬質クロムメッキは当時実用化されておらず、世界的にも先端の表面処理技術だった。その後、米国で実用化され、ライセンス

化されたが、同社は独自の理論にこだわりながら開発を続け、保険会社に勤めていた現会長の鈴木達雄が入社した70年には商品化にこぎ着けようとしていた。

用途に合わせ8種
そんな時、あるユーザー



鈴木信夫社長(左)と鈴木達雄会長

「……ばきちんとできるのは6、7個。失敗して母材を溶かしたのもあったという。当然、採算には乗らない。当時の金額で毎月20万-30万円の赤字だった」と達雄は振り返る。理論は合っていない母

に「『素晴らしい技術は星の数ほどある。良いものというだけでなく、地に足を付け、顧客に感謝される事業を立ち上げなさい』とエールを送られた」(達雄)という。

ユーザーニーズに応えることを第一に、顧客と二人三脚の開発を進め、歩留まりの向上に加え性能を高め、用途に合わせて8種類のバリエーションを生み出した。達雄は「エールを送ってくれたユーザーの言葉を一生忘れない」と心に刻みつけた。

(敬称略)

▽所在地 東京都狛江市、03・3488・4211▽社長 鈴木信夫氏▽従業員 25人▽資本金 1200万円▽売上高 3億3000万円(05年12月期)▽URL www.dai-kuron.com

中小政策・経営

新しく難しい加工品に挑戦

メッキ業へ転換

千代田第一工業は、初代

社長の鈴木張介が50年(昭和25)に興した。当初は歯科医用の医療機器修理を手がけていたが、程なく東芝の下請けとして変電盤やトランス製造に携わるようになり、従業員も100人に達する規模になった。

根っからのエンジニアだった張介は、コンピュータの開発など新たな事業分野を見つけるとすぐに手を出し、業容の拡大を目指す。しかし、人件費や開発

費が膨らみ経営が傾き、60年ごろには工場を手放すことにもなった。

エレベーターや立体駐車場を扱う商社として再出発し、東京五輪やいざなぎ景気で一息のうちに会社を支える硬質クロムメッキの研究会社や、映画の字幕をつける事業など新しい産業を営む数社を傘下に収めた。

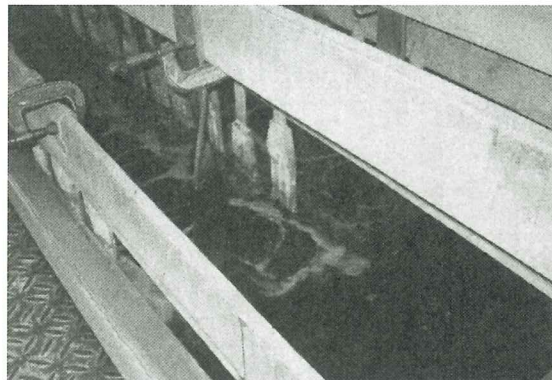
ところが、オイルショック

雄は粗利の少ない商社に見切りをつけており、「軌道に乗り始めたばかりだが、将来を感じた」(達雄)というメッキ業へと転換を決断、自ら開発を始めた。

ダイクロンの千代田第一工業の誕生だ。

徹夜で作業

とはいえ、拡大しても預金を食いつぶす時期が70年



柔軟な生産が可能なダイクロンのメッキ槽

規模が小さく、知名度もない企業に大企業から仕事があるのは誤りがある。

ある時、他社が行った飲料メーカーのライン部品のメッキ補修に不具合が出た折、千代田第

インを止められないとの思いに胸を打たれ、2泊3日で仕上げた」(達雄)。部品の曲がっていたりして同じ物はなく、メッキの付き方を同じ品質にするのに苦労したが、「社員が意気に感じて、何も言わず徹夜で作業してくれた」(同)という。

柔軟な体制構築

同社はこの一件を、新しい顧客の開拓のほか、急ぎの加工品が来てもラインを専用に分けるのではなくスケジュールに組み込む柔軟な体制構築へと結びつけていった。

勝つ

千代田第一工業②

常に改良・改善の精神で

で再び不安定な経営状態に陥っていく。

この時、法律を学び会計の知識もあつた現会長の鈴木達雄が呼び戻された。達

代いっばい続いた。現社長の鈴木信夫は「家はクリスマスチャンで、クリスマスは特別の日だったが、ケーキもなく普通に食事をした年があった」と、子供のころを振り返る。幼いながら、家の厳しさを感じていた。

そして中学生になると、放課後は当然のように工場に入るようになった。

状況を少しずつ変えていくこと、常に改良し一つひとつの問題をあきらめずにとつた改善すること、それが「千代田イズム」と信夫。事業が、「その担当者の製造ラ

千代田イズムとは納期だけでなく、新しく難しい加工品でもなんとかしてものにしよとす文化だ。そこには初代社長の張介が夢見て事業を始めたベンチャー精神が息づいている。

(敬称略)

勝つ

千代田第一工業 ③

● 老舗だけドベンチャー

自社販売に

千代田第一工業社長の鈴木信夫は、97年に当時勤めていた静岡県内のベンチャー企業を辞め、同社に入社した。社長だった鈴木達雄が狭心症で倒れ、呼び戻されたのだ。荷物も前の会社に残したまま、気持ちも固まらないままという慌ただしさだった。

名刺すら手元にない入社3日目。メッキを納めた企業からクレームが入った。入社早々、相手企業に赴いて頭を下げるようになった。台頭もあつて売上高が最盛期に比べ30%以上減少した。調査すると、新規受注が取れていないばかりか、営業担当者の商社との癒着が発覚。製造部門にも気の

微粒子打ち付け硬さ向上

が、相手から賠償請求されるようなことはなかった。このとき信夫は「(顧客に)救ってもらった」と感謝するとともに「抜けられないな」と感じたという。あらためて会社を見回すと、気にかかる部分が見え始めた。主力は製缶会社の製造ラインのガイドへのメッキだが、ペットボトルの

あきらめず解決

テーマは「滑る」。缶か

多くの力が開発支える

らペットボトルへと変化する中、樹脂が滑るメッキ「プラスチック」の開発が始まった。試行錯誤の末、表面が滑らかなダイクロンではなく、粗く接触面積を小さくすることが有効だと知った。だが、いざラインに実装すると商品にキズがついた

り、摩耗が激しく長持ちしないなど結果が伴わない。何度もあきらめようとしたが、「もう少しだから」とリスク覚悟で付き合ってくれたユーザーの存在もあって、プラスチックは生まれた。今では売上高の40%を占める同社の柱だが、問

名づけたマイクロビッカー硬度HV1600の高硬度の硬質クロムメッキ。粒子レベルの摩耗に苦しむユーザーから持ち込まれたものだ。HV1000程度だった硬質クロムメッキの硬さを大幅に向上させたのは、特殊な微粒子を打ち付

け、焼きを入れるショットピーニング。そこで表れた課題は「熱が母材に変化を及ぼすこと」(同)だった。製品化には多くの力を借りた。熱の問題は、東京都中小企業振興公社城南地域中小企業振興センターのアドバイザーの藤木榮らにより、吹き付ける粒子の量や圧力、温度などの調節で解決。また東京都は特許を共同出願にすることで、中小企業の知財保護に動いた。工場には「『どんなメッキでも付ける』と何度も挑戦した社員がいた」(同)。新商品は耐摩耗性が必要な金型部品や、ダイクロンにはなかった電気製品など大きな需要が狙える。だが信夫は「思いがあるところに人が集まる」ことに価値をみる。(敬称略)



ショットピーニングにより高硬度のダイショットが完成した。……題解決をあきらめないという、数字以上の効果を生む会社にもたらした。

同社が現在投入しようとしているのは、「ダイショット」とシ

中小政策・経営

色

勝つ

千代田第一工業④

● 老舗だけどベンチャー

地域との共生へ
千代田第一工業は社員25人の典型的な中小企業だ。メッキ業としても「中程度か小さいレベル」と社長の鈴木信夫。しかも社員の年齢は40～50代が抜けている。

委員会組織し横の関係つくる

テーマとなった。

00年に東京都鍍金工業組合の巡回指導を受けた。通常、メッキ業者は金属イオンを中和し、槽に沈殿したものを回収する凝集沈殿処理を採用している。しかし

低コスト実現

この時、組合から有害物質を社外に出さない「イオン交換方式」への転換を提案された。これは、銅やニッケ

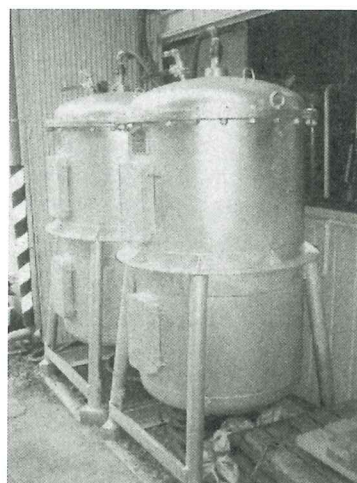
ル、クロムなどの重金属をイオン交換で100%回収し、リサイクルするシステムだ。しかし、同システムは「凝集沈殿に比べランニングコストが3倍(信夫)。1

全社員で問題を解決

り、解決にあたるシステムをつくった。企業として縦の組織だけでなく横の関係をつくって、個を生かすことを狙った。

信夫は「買ったばかりの沈殿用設備を捨てた」ことで挑戦の意思を示した。イオン交換方式の課題解決も

カ月の売り上げが約2000万円強だったころに処理コストが50万円に達した。



重金属をリサイクルするイオン交換機

信夫は社員全員で問題を解決しようと、QC、5S、安全、親睦の四つの委員会を設置、新たに生まれた問題には経験を問わず立ち候補によるチームをつくる

問題解決の活動を通じて、社内にも全員でという考えが定着した。情報もオープンにした。一日の工程はもちろん、普通なら営業担当者しか知らない1週間

先の人荷状況を、事務の女性を含めて共有する。たとえ突発的な注文が入っても人に迷惑をかけずに済む。

『坂の上の雲』へ

同時に、信夫は「ダイクロンという製品だけで生き残ってきたわけではない」(同)と考える。攻めて奪うよりも、マイナスの部分を決すればプラスになる。目の前の問題を改める姿勢を続けてきたからこそ、自分たちは生き残ってきたと考えている。

信夫は今の同社の状況を「坂の上に見える白い雲を見つめて一歩一歩のぼっている最中」と、司馬遼太郎の『坂の上の雲』のあとがきの一文になぞらえる。

「白い雲のある高みを極められるかどうかは分らないくても、初代社長の鈴木張介、2代目の鈴木達雄、そして信夫と、3代かけて事業の形を変えながらのぼってきた。挑戦はこれからも続くだろう。」

(敬称略、この項おわり。西東京・宮村昭寛が担当しました)

中小政策・経営



インターネットで
検索してください。

ダイクロン (耐磨耗性)

ブラストロン (滑り性、離型性)

ダイモール (金型滑り性)

ダイショット (硬さ、滑り性)

 千代田第一工業株式会社

〒201-0004 東京都狹江市岩戸北 3-11-9

TEL.03-3488-4211 FAX.03-3430-2651

<https://www.daikuron.com>